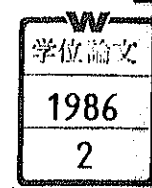


学位請求論文概要書

『古代出雲地域史の研究』

瀧音能之



昭和二十九年四月、東京府立第一高等学校卒業  
昭和三十一年四月、早稲田大学第一文学部日本史学科卒業  
昭和三十三年八月、早稲田大学大学院文学研究科史学専攻博士前期過程終了  
昭和三十四年四月、早稲田大学第二文学部非常勤講師（現在に至る）  
昭和三十七年三月、同右中退  
昭和三十八年四月、同右中退  
昭和三十九年四月、同右中退  
昭和四十一年四月、同右中退  
昭和四十二年四月、同右中退  
昭和四十四年四月、同右中退  
昭和四十六年四月、同右中退  
昭和四十八年四月、同右中退  
昭和五十年四月、同右中退  
昭和五十二年四月、同右中退  
昭和五十四年四月、同右中退  
昭和五十六年四月、同右中退  
昭和五十八年四月、同右中退  
昭和六十年四月、同右中退  
昭和六十二年四月、同右中退  
昭和六十四年四月、同右中退  
昭和六十六年四月、同右中退  
昭和六十八年四月、同右中退  
昭和七十年四月、同右中退  
昭和七十二年四月、同右中退  
昭和七十四年四月、同右中退  
昭和七十六年四月、同右中退  
昭和七十八年四月、同右中退  
昭和八十年四月、同右中退  
昭和八十二年四月、同右中退  
昭和八十四年四月、同右中退  
昭和八十六年四月、同右中退  
昭和八十八年四月、同右中退  
昭和九十年四月、同右中退  
昭和九十二年四月、同右中退  
昭和九十四年四月、同右中退  
昭和九十六年四月、同右中退  
昭和九十八年四月、同右中退  
昭和九十九年四月、同右中退

履 歴 書

氏名 瀧音能之（たきおとよしゆき）

生年月日 一九五三年八月十七日

出生地 北海道

現住所 千三五〇 川越市連雀町三〇―四―一、一〇一

学歴 電話〇四九二―二六―一七三八

一九七七年三月 早稲田大学第一文学部日本史学科卒業

一九八〇年三月 明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期過程終了

一九八〇年四月 同右博士後期過程入学

一九八七年三月 同右中退

一九八二年四月 淑徳高等学校社会科非常勤講師（一九八七年三月まで）

一九八五年四月 尚美学園短期大学非常勤講師（現在に至る）

一九八七年四月 淑徳短期大学非常勤講師（現在に至る）

一九八七年四月 早稲田大学第二文学部非常勤講師（一九八九年三月まで）

研究業績

- ①『出雲の神々―神話と氏族―』（共著、筑摩書房、一九八七年十月）。
- ②『風土記をひらく』（編著、新井出版、一九八七年十二月）。
- ③『律令国家の展開過程』（編著、名著出版、一九九一年三月）。
- ④『スサノオ神と古代の出雲』（『日本仏教』五二号、一九八〇年十一月）。

- ⑤「古代出雲の海人集團の分布について」(『史報』三三三、一九八一年十一月)。
- ⑥「宗像氏と大和国宗像神社」(『明治大学大学院紀要』第十九号(四)文学編、一九八二年二月)。
- ⑦「古代における御子神の存在形態——『出雲国風土記』を中心として——」(『地方史研究』一八三号、一九八三年六月)。
- ⑧「出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立過程」(『日本古代史論苑』所収、一九八三年十二月)。
- ⑨「スサノオ神をめぐる二、三の問題」(『日本宗教史研究年報』六号、一九八五年五月)。
- ⑩「古代出雲の寺と新造院」(『民衆生活と信仰・思想』所収、一九八五年十一月)。
- ⑪「古代の日本海と伯耆国宗形神社」(『歴史地理学』三二二号、一九八六年三月)。
- ⑫「国引き神話の基盤」(『日本宗教史論纂』所収、一九八八年五月)。
- ⑬「国引き神話の北門について」(『駿台史学』七五号、一九八九年一月)。
- ⑭「熊野の名について」(『三重——その歴史と交流』所収、一九八九年十月)。
- ⑮「土蜘蛛の原義について」(『象徴図像研究』四号、一九九〇年三月)。
- ⑯「神話の世界・出雲」(『神々の誕生と展開・講座神道第一巻』所収、一九九一年一月)。
- ⑰「風土記にみる葬制・墓制」(『原始・古代日本の墓制』所収、一九九一年四月)。
- ⑱「記紀神話の意匠——スサノオ神の八岐大蛇退治神話を中心として——」(『日本古代社会史研究』所収、一九九一年四月)。
- ⑲「古代出雲の四大神」(『古代文化』三八八号、一九九一年五月)。
- ⑳「八束水臣津野命の神名について」(『出雲古代史研究』創刊号、一九九一年五月)。

# 目次

『古代出雲地域史の研究』と題する本論の構成は次に示す目次の如き構成をとる。

## 緒論

第一節 緒言

第二節 「ケタ政治圏」の構想をめぐる

### 第三節 古代出雲地域の特性

第四節 史料としての『出雲国風土記』

第一篇 南出雲と北出雲

第一章 スサノオ神の研究

## 第二節 問題の所在

第二節 記紀のスサノオ神

第三節 『出雲国風土記』にみられるスサノオ神

## (一) スサノオ伝承の内容と分布の史料価値

(二) スサノオ伝承の検討

第四節 スサノオ神の原像

第五節 南出雲と鉄

## 第六節 吉備との交流

第七節 スサノオ神と古代の出雲

## 第八節 結語

付論 八岐大蛇退治神話における八岐大蛇と草薙剣の意味

第一節 問題の所在

第二節 八岐大蛇の本質

第三節 草薙剣がもっている意味

第四節 結語

第二章 国引き神話の基盤

第一節 国生みと国引き

第二節 国引き神話の概要

第三節 島根半島の地理的景観

第四節 八束水臣津野命とその御子神

第五節 結語

第三章 八束水臣津野命の神名について

第一節 問題の所在

第二節 神名の解釈をめぐって

第三節 八束水臣津野命について

第四節 オミヅヌノミコトから八束水臣津野命へ

第五節 結語

第四章 国引き神話の北門について

第一節 問題の所在

第二節 北門をめぐる諸説

第三節 北門の原義とその地名比定

第四節 佐伎国と農（良）波国とについて

第五節 結語

第五章 出雲の海人集団の分布

第一節 問題の所在

第二節 海産物と海人

第三節 浦と海人の分布

第四節 結語

第六章 古代の美保湾と宗形神社

第一節 問題の所在

第二節 「ムナカタ」を社名に含む古社

第三節 伯耆国宗形神社の位置と環境

第四節 伯耆国宗形神社と筑前国宗像神社

第五節 結語

付論 宗像氏と大和国宗像神社

第一節 問題の所在

第二節 寛平五年十月廿九日付官符について

第三節 大和国宗像神社について

第四節 神社整備の状況

第五節 筑前国宗像郡金埴について

第六節 結語

第二篇 古代出雲の特性

第七章 『出雲国風土記』と天皇

第一節 問題の所在

第二節 『風土記』にみえる天皇

第三節 『風土記』における天皇の表象

第四節 『出雲国風土記』の中の天皇

第五節 「天皇」からみた出雲的世界

第六節 結語

第八章 出雲の四大神と出雲国造

第一節 問題の所在

第二節 四大神の個別検討

(一) 佐太大神

(二) 野城大神

(三) 熊野大神

(四) 大穴持命

第三節 四大神の役割と出雲国造

第四節 結語

付論 熊野の名について

第一節 問題の所在

第二節 紀伊と出雲の熊野とその周辺

第三節 丹後・近江の熊野とその周辺

第四節 伊予・但馬・越にみられる熊野

第五節 熊野の原像

第九章 出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立過程

第一節 問題の所在

第二節 『延喜式』にみられる神賀詞奏上の規定

第三節 神賀詞奏上の事例

第四節 神賀詞奏上記事の検討

第五節 結語

第十章 古代出雲の寺と新造院

第一節 問題の所在

第二節 寺と新造院の記載

第三節 研究史の吟味(Ⅰ)——新造院布施屋説をめぐって——

第四節 研究史の吟味(Ⅱ)

第五節 寺院併合策からみた寺と新造院

第六節 結語

総括

補論一 韓国伊太島神社をめぐって

補論二 岡田山一号墳と銘丈鉄刀

以上の如き構成をもって記述した本論文の要点を最初に概略説明すると以下の如くである。

日本古代史上における出雲国の存在に考えを及ぼすとき、その極めて顕著な特殊性に関しては誰しも瞠目せずにはおられないであろう。「記紀」のなかで展開されるいわゆる出雲神話の重要性や、出雲国造に関わる諸々の特殊性等々数えあげれば限りがない。したがって今日に至るまで多くの学者達による、さまざまな考察が試みられてきたことは周知の事実である。また、最近の岡田山一号墳出土の鉄刀銘の発見や、荒神谷遺跡における銅剣や銅鐸の発見は、研究者のみならず日本人一般の多くの人のびとの注目を集めた。このような特異性の強い出雲の歴史を考察することは、単に一地域の歴史を究明するということのみにとどまらず、ひいては日本史の全体、就中、古代国家の形成という極めて重大な問題の解決の上にも重要な関わりをもつことになるのである。

特に最近における日本史学界の主要な動向の一つとしての地域史研究の意識の高まりや、あいついで報告されてくる考古学上の重大な新事実の発見やその成果は、もはや今までのような中央からのみの視点で日本史を考究するだけではすまされなくなってきている。さらに、地域史研究のなかにおいても、「大和」に対するアンチ大和としての「ひとつの地域」といったとらえ方だけでも最早、十分とはいえなくなってきているといえよう。もとより、中央と地方といった視点は重要であると考えるが、それと同時に、ひとつの地域が

他の地域とどのような関わり合いを持ってきたかという視点もまた、欠かすことのできないものとなってきたと考える。本論文においては、こうした立場に基本を置いて出雲の日本古代史上におけるその歴史的意義を考察していくことに主眼を定めた研究をおこなった。

具体的には、出雲の国内における地域を更に細分してその各々の特殊性に注目して、出雲と北出雲という視点から出雲をとらえることと、更にそれらを総合した上での出雲が他地域に対して持っている特異性を抽出することとの二つの面から出雲の古代史を考察することとした。

そこでまず、南出雲と北出雲という視点からのアプローチを試みたものが第一篇である。出雲の古代史を考える場合、従来、東部と西部の関係について論及されるのが一般的である。これは、戦後、井上光貞氏が「国造制の成立」(『史学雑誌』六〇巻十一号)において、大和による出雲の征服とは、西部の杵築の勢力を滅ぼし、東部の意宇に勢力をもつ出雲氏を国造としたことであると主張されて以来、出雲理解の上での本格的な問題とされるようになった。この井上氏の見解は、現在でも大きな影響力をもっていると思われるが、其後において、一方では、出雲国造家のもととひとつであり、ただその本拠地を杵築から意宇へと移したにすぎないとする古井良隆氏の説や、征服のされ方において、大和の権に支持される神門勢力の西部支配の成功、そして、敵対勢力をもった東部の国造の大和への屈伏という過程を考える原島礼二氏の説など、さまざまな説が提示されるに至った。こうした出雲を東部と西部との二つに分けて考える議論は、しばしば多くの学者によってなされてきたところであるが、南部と北部とについては、いままでほとんど議論の対象

とされていないように見受けられる。たしかに、東部と西部とが持っている政治的意義は重要であり、したがって、これらの地域の関係の解明が重大であることは論をまたない。しかしながら、南部と北部とについても部分的には、南部の中国山地一帯における製鉄集団の存在や北部の海浜部における海人集団の存在も指摘されるところである。これらの集団の存在が実際に想定されるのであれば、それぞれの地域におけるこれらの集団の役割は決して小さくはないはずであり、南出雲と北出雲の関係についても東出雲と西出雲との場合と同様に注意深く論じられなければならないであろう。こうした点から、古代の出雲の南北は、東西と共にまた一つの重要な視点であると考えられる。

第一篇においては、これらの点をふまえて、南出雲と北出雲とについてそれぞれの地域の特徴を明らかにした。第一章「スサノオ神の研究」は、スサノオ神の多角的考察を試みたものであると同時に、第一篇の論議の基調としての役割をも果たしている。『出雲国風土記』をみると、スサノオ神とその御子神達の伝承の分布は興味深いかたよりをみせている。すなわち、スサノオ神の四か所の伝承のうち、三か所まではいずれも山間部に分布し、残りの一か所は安来郷にみられる。そして、これら四か所は、東西にほぼ一直線上に位置している。これに対して、御子神達の伝承は、すべてスサノオ神の四か所の伝承を結んだ一直線上の北方に分布している。こうしたことに注目して、本論文は、スサノオ神の伝承の分布地、およびそれよりも南方を南出雲、それよりも北方を北出雲と規定した。第一章では、南出雲の諸様相をスサノオ神を軸に考察し、合わせて南出雲と北出雲との関係についても検討を加えた。これに対して、第二章「国引き神話の基盤」、第三章「八束水臣津野命の神名について」、第四章「国引き神話の北門について」、第五章「出雲の海人集団

の分布」、第六章「古代の美保湾と宗形神社」は、北出雲の諸様相を明らかにしようとしたものである。第二章から第四章までは、国引き神話をテーマとして、島根半島部を中心とする地域を考察したものであり、第五章と第六章は、海人集団に焦点をあてて北出雲の様相の究明をめざした。出雲の海人に関しては、しばしば指摘されるのにもかかわらず、その具休像については、従来、あまり明確にされていないように見受けられる。しかしながら、対馬海流を利用して古代の日本海を航海したと考えられる九州北部の宗像系海人をはじめとする多くの海人達の活動を想定するとき、出雲の海人の役割は決して小さくはなかったはずである。『出雲国風土記』の記載を細かにみると、現在の島根半島の東部、および西部には、濃密な海人の分布を読みとることが可能である。また、伯耆国宗形神社の分析から美保湾を中心とするこれらの地域と宗像系海人との関係を見い出すことができる。こうした地域にみられる海人の具体的究明はいままでなされておらず、新たな視点を提供するものであると考える。

これに対して、第二篇では他地域と比較して出雲が持っている特異性に注目して、出雲地域の究明を試みた。いわば、第一篇が出雲の内部からの考察であるのに対して、第二篇は外側からの考究ということになる。第七章「『出雲国風土記』と天皇」は、『出雲国風土記』にみられる天皇の存在形態を追求したものである。『出雲国風土記』のなかの天皇像が、他の『風土記』とは大きく異なっていることを明らかにし、そのことを通して、さらに出雲の他地域に対する独自性について論及した。第八章「出雲の四大神と出雲国造」は、『出雲国風土記』において、特別な扱いをされている四大神に注目して、四大神が果たしている役割について考察を加え、さらに、出雲国造との関係についても検討した。『

『出雲国風土記』では、佐太大神・野城大神・熊野大神・大穴持命（天の下造らしし大神）の四神を特に大神として表記している。しかし、鎮座地をみると、佐太・野城・熊野の三大神は出雲国の東部であるのに対して、天の下造らしし大神は西部の杵築である。また、佐太大神をはじめとする三大神は地名に大神がプラスされた形で神名が構成されているが、天の下造らしし大神は天下、すなわち出雲国全体を対象とした神とされている。これらをさらに細かく分析すると、熊野大神が出雲国造の祖によって崇拜されていた神であり、北方の佐太大神、東方の野城大神、南方の熊野大神、そして、西方の宍道湖によって囲まれた地域が出雲国造家の祖の支配領域と規定できる。天の下造らしし大神は、出雲国造家の支配領域が西部にまで及び、文字通り出雲の支配者としての出雲国造家が確立された段階において出雲全域の神として祭祀されるようになった神と考えられる。従来、四大神としてまとめて考察されることがほとんどなかった四神であるが、『出雲国風土記』を注視するならば、出雲国造家の支配領域の拡大の過程が浮かびあがってくる。第九章「出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立過程」は、出雲国造に課せられる神賀詞を儀礼という視点でとらえ、その成立の課程を説明した。その結果、霊龜二年（七一六）から天長十年（八三三）まで文献上において確認できる出雲国造神賀詞を鑑略期・発展期・完成期の三段階に分けてとらえるべきであることを明らかにした。第十章「古代出雲の寺と新造院」は、仏教の地方伝播の問題を念頭において、出雲にみられる寺と新造院とについて考察し、特に出雲国にのみ存在が確認される新造院の実体の説明を試みた。その結果、新造院は、奈良時代初期に施行された寺院併合政策との関わりでとらえるべきであり、国家の併合政策に従っていくつかの寺院が合併して新たに造られた寺院であることが明らかになった。新造院につい

ては諸説がみられ、いまだに定説をみないが、私見によって地方寺院の状況や国家による統制の様子の一端が明らかとなり、さらに、出雲国にのみみられる新造院の究明によって、他地域に対する出雲国の特性が明白になったと考える。

以上のように、大きく分けて二つの視点から出雲の古代史の解明をめざしたが、その際にとり扱った中心的史料は、『出雲国風土記』である。『出雲国風土記』の史料性については、第一章の第三節において検討を加えたように、十分に史料価値を持っていると考えられる。したがって、『出雲国風土記』を最大限に活用して古代出雲の歴史の解明に迫ることは有効な方法であると考ええる。そこで、次には各章別の論旨の要点を各説的に述べることにする。

第一章の「スサノオ神の研究」は、スサノオ神の総合的把握をめざしたものであるが、それと同時に第一篇全体の基調をなしている。まず、『古事記』や『日本書紀』にみられるスサノオ神と『出雲国風土記』におけるスサノオ神との間にみられる差異の大きさに注目して、その原像について検討を加えた。その結果、スサノオ神は出雲国の須佐郷を本来の鎮座地とする製鉄神であり、さらにスサノオ神のルーツをさかのぼるならば、朝鮮からの渡来神であると規定するにいたった。

また、この結論から、須佐郷を中心とする地域に製鉄神を崇拝する人びと、すなわち、製鉄集団の存在を想定し、さらに、『出雲国風土記』にみられる産鉄関係の記載などを拠所として、飯石郡東部から大原郡西部にかけての地域に製鉄集団の基盤があったであろうことを推定した。そのことの前提として、『出雲国風土記』のスサノオ神の伝承とその御子神達の伝承、すなわちスサノオ伝承ともよぶべき一連の伝承の史料批判をおこない、そ



れらが史料価値を持っていることを明らかにした。

さらに、中国山地をルートとして、南出雲と往来があったと考えられる吉備との問題について言及した。『出雲国風土記』には、備後国へ通う道として五つのルートが記載されている。また、『日本書紀』の崇神天皇六十年秋七月十四日条には、出雲の神宝献上をめぐる争いが記されており、この伝承のなかに吉備津彦が登場している。これらの点から出雲と吉備との間に早くから交流があったことが窺われるが、その時期については遅くとも弥生時代後期あたりが考えられる。それは、出雲系の鼓形器台の吉備への伝播、および吉備系の器台形土器の出雲への波及という考古学上の遺物の面から想定することができる。南出雲に製鉄集団の存在を想定したが、吉備もまた製鉄で知られる地域である。吉備はこれに加えて製塩地域としても重要である。一方、出雲は、近年にいたってようやく製塩遺跡が検出され始めたが、それまでは製塩関係の遺跡がでておらず、出雲の製塩については謎が多かった。この点については、今後の成果を待たなければならぬが、吉備とは異なった様相を示している。これらのことを考えるならば、出雲と吉備との間に製鉄技術や塩を媒介とした交流を政治的な交流に加えて想定することができよう。

さらに、出雲内部についてみるならば、『出雲国風土記』にみられるスサノオ伝承のうち、祖神であるスサノオ神の伝承は須佐郷から安来郷にかけて東西にほぼ一直線に並び、御子神達の伝承はいずれもこの東西に結んだ一直線よりも北方に分布している。この東西の一直線をスサノオラインと名づけ、この地域およびスサノオラインよりも南方を南出雲と規定し、御子神達の伝承が点在する地域、すなわちスサノオラインよりも北方を北出雲と考えた。そして、南出雲にはスサノオ神を信仰する製鉄集団の存在を想定した。それに対

して、御子神達の伝承は、そのほとんどが海辺もしくは水辺にみられることから海人集団との関係が考えられる。つまり、御子神達は、海人集団によって崇拜されていた神であると推測される。また、御子神達を個別にみていくと、それぞれの地域の土着神であり、祖神であるスサノオ神との関係はさほど強いとはいえない。このことは、これらの神がもとからスサノオ神の御子神であったのではなく、のちになってスサノオ神の系列にとり込まれていったことをもものがたっている。こうしたスサノオ伝承の分布を考慮して、南出雲の製鉄集団による北出雲への進出、すなわち海人集団の支配化を推測し、その過程を考察した。

付論「八岐大蛇退治神話における八岐大蛇と草薙剣の意味」は、記紀にみられる八岐大蛇退治神話が記紀神話のなかで果たしている役割について明らかにしたものである。八岐大蛇の実体については、従来からさまざまな指摘がなされており、それらにはいずれも教えらるる点が少なくない。しかし、「記紀」の編纂者の立場にたつならば、八岐大蛇を従来のように具体的な特定物の神話化とみなすよりも、むしろ出雲そのものの象徴と考える方がより適切と思われる。

また、八岐大蛇退治神話は、ペルセウス・アンドロメダ型説話に属する神話であるが、このタイプの神話や説話には、草薙剣に相当するような物は登場しないのが一般的である。しかしながら、この点についても、「記紀」の編纂者の立場からみるならば草薙剣は天上への献上物であり、服属の証拠ともいうべき品ということができ、八岐大蛇退治神話にとっては絶対に欠かすことのできない要素であると考えられる。

つまり、八岐大蛇退治神話は、出雲、すなわち、地上が天上に服属することを主題とし

た神話であり、天上から派遣された神がスサノオ神である、という構図をもっていることができる。従来、スサノオ神を出雲の象徴とするのが一般的であるが、ここではそうした考えをとらず、八岐大蛇を出雲の象徴とし、スサノオ神はそれを服属させるために派遣された神であるということを明らかにした。そして、この八岐大蛇退治の神話は、記紀神話のなかにおいて、そのあとに続く国譲り神話の前ぶれとしての役割を担っていると考えることが出来る。

第二章から第六章までは、北出雲の諸様相の解明をめざして考察を加えたものである。なかでも第二章、第三章、および第四章は、著名な国引き神話について論及を試みたものである。

まず、第二章「国引き神話の基盤」は、国引き神話の原形について検討をおこなった。国引き神話は、『出雲国風土記』の意宇郡の郡名由来を述べたものであり、志羅紀（新羅）をはじめとして、北門から二か所、そして、高志（越）の合わせて四か所の地域から国を引いてきて、現在の島根半島に相当する地域を形成するという内容をもっている。この四か所の国引きのうち、内容を詳細にみていくならば、北門からの二か所の国引きの部分が、この国引き神話の原形部分と考えられる。つまり、北門の佐伎国と北門の農波国（波良国）からの国引きによって形成されたことになっている部分がこの神話の原形ということができる。そして、この二か所の国引きによってつくられた地域が閩見国、および狭田国ということになっている。すなわち、島根郡の中部から西部、さらには隣接する秋鹿郡の境にかけての地域がこれに相当する。つまり、これらの地域にみられた伝承が、『出雲国風土記』に記載されている国引き神話の原形であり、この神話の主人公であり国引きの

神として登場する八束水臣津野命についても、元来は、島根郡中部から西部、そして、秋鹿郡にかけての地域に信仰圏をもつ神であったと考えられる。こうした地域神としての八束水臣津野命を主人公とする国引きの民間伝承が、『出雲国風土記』の編纂過程において、形を整えられ、出雲国の国引き神話へと変質していったと理解することができる。

この第二章をうけて、第三章「八束水臣津野命の神名について」は、国引き神話の主人公である八束水臣津野命の神名の解釈について考察を加えたものである。八束水臣津野命に関して、いままでにもさまざまな指摘がなされているが、こと神名については、八束水と臣津野命（意美豆努命・オミツヌノミコト）とに分けてとらえるのが適切であり、神としての本来の意味は、オミツヌノミコトの方にあると考えられる。そして、意味的には、大水の主の神、すなわち、水神と把握するのが妥当であり、元来は、島根郡の中部、および西部から秋鹿郡にかけての地域に信仰されていた大水の主神と規定することが可能である。また、八束水については、八束と水とに分けて考えることができ、八は実際の数をいっているのではなくて数の多さを表わしており、束は長さの単位であると考えられる。すなわち、八束水とは、「長い水」と理解することができる。したがって、八束水臣津野命という神名は、本来は大水の主神という神格をもつオミツヌノミコトであったものに、八束水が付加されたと考えられる。そして、オミツヌノミコトは、島根半島の中部にあたる地域に信仰圏をもつ神であり、この地域に伝承されていた国引き伝承の主人公の神であったと推測される。これらのことを考慮にいれて、あらためて八束水という形容にふさわしいもの、すなわち、はるかに長い水という意味にあてはまるものを考えるならば、国引きの際に用いられた網の存在が想起される。もとよりこれは、神話という次元に

おいてではあるが、海上を長く伸びる一本の網は、まさしく細長くはるかに続く一本の水を連想させる。すなわち、名称的にはオミツヌノミコトと称された島根半島の土着神が、『出雲国風土記』の編纂の過程において、出雲国の国引きの神としての役割を与えられ、国引きのために海上はるかに伸びた網をイメージさせる八束水という形容が加えられて、八束水臣津野命という神名が形成されたと考えられる。

第四章「国引き神話の北門について」は、国引き神話にみられる地名のなかで、従来、明確にされていなかった「北門」についてその地名比定をおこなったものである。国引き神話は、志羅紀、北門の佐伎国、同じく北門の農波国（波良国）、そして高志の四か所の地域からそれぞれ国を引いてくるわけであるが、このうち志羅紀と高志については、各々、新羅、越と考えるのが通説となっている。しかし、北門については、具体的にどこをさすのかいまだに定説をみるにいたっていない。まず、北門の意味であるが、文字通り「北の門」、つまり、北のとびらの意味と理解するのが妥当である。すなわち、出雲の北方に位置するとびらが北門ということになる。そして、それは具体的にいうならば、隠岐のことをさしていると考えられる。隠岐は、島根半島の北方約五〇キロメートルの海上に位置する群島である。大小合わせて一八〇あまりの島々から成っているが、主なものは知夫里島、西ノ島、中ノ島、そして、島後の四島であり、島後に對して他の三島は位置的に近接しており島前と總称される。この島前・島後は、出雲からみるならば、北方の海上に位置しており、あたかも二枚のとびら、すなわち北門とよぶにふさわしい様相を示している。また、国引き神話は、はじめに新羅からの国引きがおこなわれ、越からの国引きで終わるというように、西から東へと国を引いてくる地域が記載されており、隠岐を北門とするこ

とは、こうした地理的配置にも適合する。さらに、北門の佐伎国については、出土している木簡などから、現在の島前の海士町崎をこれにあてるのが妥当である。これに對して、北門の農波国については、現在のところ断定的に地名を比定することが困難である。しかし、この農波国は、表記的には、諸本にみられるように良波国と考えるのが適切である。したがって、現在、日本古典文学大系のなかの『風土記』などによって流布している農波国という表記には問題があるといえる。そして、良波は、本来、波良という地名であったものが転倒して表記されたものと考えられる。その上で、地名としての波良（ハラ）についてさがすならば、現在の島後の西郷町大久に小字名として原という地名が確認される。現段階においては、あくまでも推測の域を出ないが、島前の佐伎国に對して、ここが農波国（波良国）である可能性は十分にあると思われる。

第五章「出雲の海人集団の分布」では、北出雲における海人集団の分布を具体的に想定した。分布を想定する手段としては、海産物の捕獲場所、および捕獲量という点と、航海術のたくみさという点の二つの要素を考慮にいて分析を試みた。その結果、海産物の捕獲という点では、島根郡が最大であり、次いで、秋鹿、楯縫、出雲、神門の四郡がほぼ同程度の捕獲量であり、意宇郡が最も少なかったであろうという結論を得た。このことを海人集団の分布にあてはめてみるならば、特に島根郡に海人の濃密な分布が想定される。次いで、秋鹿、楯縫、出雲、神門の四つの郡、そして、意宇郡にも海人集団の分布が考えられるが、このうち、『出雲国風土記』をみると、出雲郡の西北部、すなわち、日御碕付近にも、『御碕の海子』の記載がみられ、鮑を獲っていたことが知られる。さらに、『出雲国風土記』には、ここで獲れる鮑が出雲国で最も優っていると明記しており、これらの地

域には、海人集団の根拠地があったと考えられる。つまり、海産物の捕獲という点からみると、島根郡と出雲郡の北西部とに海人集団の大きな根拠地を想定することが可能である。また、航海術のたくみさという点からみるならば、『出雲国風土記』にみられる浦の記載が注目される。『出雲国風土記』において、浦と記された地名は、わずかに四か所しかみられない。島根郡に三か所（久毛等浦・賀留比浦・手結浦）と出雲郡に一か所（宇礼保浦）あるのみである。そして、この四か所の浦には、浜や埼などにはない停泊可能船数の記載がみられる。浦の実体については、水野祐氏による水軍の基地説をはじめとする諸説が提示されているが、史料制約が強く定説とされるまでにはいたっていない。しかしながら、浦がもっている特殊性については、十分に肯定することができるとは思えない。そこには記載されている船についても通常の漁船ではなかったであろうことは理解できる。つまり、浦は特殊な船の碇泊地であり、その船は一般の漁船などから比べるとおそくは大型の船であったと考えられる。こうした浦の状況を考慮するならば、そこには船を操縦することにたけた海人集団の分布が想定できる。つまり、浦の位置から、島根郡の日本海沿岸地域の一帯および出雲郡の北西部の海浜地帯に海人集団の根拠地があったと考えられる。出雲国における海人集団の分布を、海産物の捕獲という点と、航海術のたくみさという点とから検討を加えた結果、共に、島根郡の日本海沿岸地域と、出雲郡の北西部の海浜地帯とに海人集団の分布を想定することができた。このことは、とりもなおさず、こうした海人集団の分布の推定の妥当性を裏づけていると考えられる。以上のことから、島根郡の日本海側一帯と出雲郡の北西部の沿岸地域とに海人集団の根拠地を想定して大過ないと考えられる。

第六章「古代の美保湾と宗形神社」は、『出雲国風土記』の記載と米子市に鎮座してい

る宗形神社とに注目して、古代の美保湾についてその状況を追求したものである。現在、美保湾は、弓ヶ浜によってほぼ完全に境がつけられた形となっており、島根県側と鳥取県側とは地形的にはっきりと隔絶された様相をみせている。しかしながら、『出雲国風土記』のなかでは、弓ヶ浜は夜見島と表記されており、少なくとも八世紀初期の段階には、中海と美保湾とは現在のような分離された状態ではなかったと考えられる。それどころかむしろ、中海と美保湾とはひとつの大きな湾を形成していたとみなすことができる。そして、夜見島が日本海の荒波をさえぎる天然の防波堤の役割を果たしていたと考えられる。すなわち、出雲の東部と伯耆の西部とは、同一の生活文化圏に属していたということが出来る。出雲の東部とは、島根郡の東部および意宇郡の東部にあたっており、このうち、島根郡については、第五章で考察を加えたように、海人集団の根拠地を想定することができる。また、米子市に所在する宗形神社は、式内社であり、社名から筑前国の宗像神社との関係が想起される。この両社については、筑前国からの分祀と考えるのが妥当であろうが、本社と末社という本末関係でとらえるのではなくて、同神社とすべきである。すなわち、伯耆国の宗形神社の由来については、対馬海流を利用した九州北部の宗像系の海人が港としての立地を備えた現在の米子市付近に入ってきて、居住するようになり、自分達の崇拜する宗像神を祀ったのが伯耆国宗形神社の由来であると考える。こうしたことを考え合わせると、八世紀初期、およびそれ以前において、美保湾沿岸地域における宗像系海人の活発な行動を想起することができる。

付論「宗像氏と大和国宗像神社」は、伯耆国宗形神社と同様に、「ムナカタ」を社名にもつ大和国宗像神社をとりあげ宗像氏および筑前国宗像神社との関係について検討を加え

た。大和国宗像神社は、本来的には筑前国宗像神社とは同神別社の関係であるが、のちに筑前国宗像神社の末社と名乗るようになる。つまり、伯耆国宗形神社と同じく、同神別社の立場であったものが、末社に変化してしまっているのである。大和国宗像神社の場合は、伯耆国宗形神社に比べて史料が豊富であり、その変化の過程を追求することが可能である。「ムナカタ」を名乗る神社と筑前国宗像神社との関係を探る上で、大和国宗像神社の存在は重要であると考えられる。また、この付論においては、第五章においてふれた筑前国宗像郡の金崎についてさらに検討を試みた。

以上が第一篇の内容であり、出雲を南北という視点から考察を加えたが、第二篇では出雲が他の地域と比べて持っている特殊性に注目して、それらの究明を通して出雲地域の独自性を明確にしようとした。

具体的には、第七章において天皇の問題をとりあげた。すなわち、「出雲国風土記」と天皇―は、他の『風土記』と比較して、『出雲国風土記』には天皇の登場形態が特異であることに注目してその説明をめざしたものである。現在、まとまった形で残されている五か国の『風土記』のうち、出雲国を除く四か国には天皇が数多く姿をみせる。しかし、そこにみられる天皇たちは、存在感に乏しく、その天皇が登場する必然性についてもさほど強くないことが多い。それに対して、『出雲国風土記』には、天皇はわずかに四例のみしか記載されていない。さらに、天皇の登場例をみていくと、他の『風土記』にはよくみられる天皇の巡行説話のタイプが一例もみられない。しかし、『出雲国風土記』のなかにみられる天皇が登場する説話には、政治的な要素が色濃くみられ、記録性を窺うことができる。つまり、『出雲国風土記』の場合、天皇には存在感があり、登場の必然性を感じることが

できる。すなわち、天皇は曖昧で代替のきく存在として姿をみせるのでは決してなく、むしろ、特定性・限定性をもった存在として登場し、その説話の時代を限定し、その内容を記録するために欠くことのできない役割を果たしている。こうした特異性の理由としては、何よりも編纂者の問題が考えられる。一般の『風土記』は、国司層が中心となって作成されたのに対して、『出雲国風土記』は出雲国造によって編纂され、国司は一人も関与していない。そのため、他の『風土記』とは異って在地色が強く残されており、説話の主人公についても『風土記』に一般的にみられるような天皇へのさしかえがなされなかったと考えられる。つまり、他の『風土記』は、編纂の中核として国司層が関与することによって国司層の視点、すなわち思想的な意味において天皇を中心とする国家レベルの視点が導入されたのに対して、『出雲国風土記』の場合は、出雲国造を責任者として編纂された結果、出雲国造家レベルの視点で全体が統一され、いわゆる出雲的世界が残されたと考えられる。第八章「出雲の四大神と出雲国造」は、『出雲国風土記』に大神と特筆される四神について考察し、それらの神々と出雲国造との関連を検討したものである。『出雲国風土記』をみると、数多く登場する神々のうちでも、大穴持命・熊野大神・佐太大神・野城大神の四神は特に大神と表記され、さらに、大穴持命と熊野大神の社は大神と記されている。こうした表記には、当然のことながら必然性があるはずであるが、従来、四大神という視点で総合的に分析を加えたものは意外に少ないようにみうけられる。四大神を個別に検討し、その性格を分析するならば、熊野大神・佐太大神・野城大神のグループと大穴持命とに分けて把握するのが妥当と考えられる。すなわち、前者は「地名」に大神が付加されて神名を形成しているのに対して、後者は「天の下造らしし大神」と称されており三神とは異質

性をみせている。また、鎮座地についても、前者が意宇郡を中心とした出雲の東部であるのに対して、後者は西部に位置している。これらのことから、前者の三神は、出雲国造家の旧来の支配領域を示しており、後者は、出雲国造家が出雲全域を掌握して名実ともに出雲国造としての立場を保持するにいたった段階で出雲全土の神として迎えられた神と考えることができる。

付論「熊野の名について」は、出雲をはじめとする諸地域にみられる熊野について、その原義の分析を試みたものである。具体的には、出雲・紀伊・丹波・近江・伊予・但馬・越中に検出できる熊野について個別に検討し、その全体的把握をめざした。その結果、熊野の名称を持つ地域は、山間部に位置しており、それと同時に海に近接した地域でもあることが確認できる。そして、地形的には、複雑に入りこんでいる場合が多く、海岸部はリアス式の地形になっていることが多い。また、伝承的には、黄泉国、あるいは常世国をはじめとする神仙思想に結びつくものが周辺地域にみられることが多い。こうした点をふまえてあらためて熊野を注視するならば、熊は「隈」、すなわち、奥まった場所と考えられる。つまり、熊野は、奥まった野ということであり、これは、海からみて奥まった場所ということに他ならない。本来、熊野は、こうした場所に常世国などの神仙思想の影響が結びついて生まれた名称と考えられる。

第九章「出雲国造神賀詞奏上儀礼の成立過程」は、神賀詞の奏上を儀礼という視点からとらえ、その成立過程を段階的に把握したものである。出雲国造神賀詞は、出雲国造が代替りごとに入朝して、天皇の御世をたたえ、服属の証として奏上したもので、文献的には、霊龜二年（七一六）の出雲果安の奏上から天長十年（八三三）の出雲豊持にいたるまでの

ものが確認できる。それぞれの奏上記事について個別に検討を加えると、この期間を奏上記事の内容から三つの段階に分けてとらえることができると思われる。すなわち、出雲果安と次の出雲広島の時期が第一段階であり、出雲弟山から出雲国成にいたるまでが第二段階、そして、出雲人長から出雲豊持までが第三段階となる。第一段階の時期の特徴は、神賀詞の奏上にさいして天皇の臨席がみられないか、もしくは不明である、という点がある。こうしたことから、第二段階からは、天皇の臨席の記述が散見されるようになる。こうしたことなどから、第一段階を神賀詞奏上儀礼成立の揺籃期ととらえた。第二段階の時期における特徴は、神賀詞奏上にさいして天皇の臨席があったと推定されることである。しかし、その場所については、あるいは大安殿であったり、あるいは東院であったりして一定していない。しかしながら、出雲国成の奏上記事のなかに、「其の儀、常の如し」という文言が含まれていることを注視するならば、儀礼としての形式がほぼ整えられてきていることが窺える。こうしたことから、第二段階を神賀詞奏上儀礼の発展期ととらえた。最後の第三段階の特徴としては、天皇の臨席する場所が大極殿にほぼ固定されてきていることがあげられ、これは『延喜式』にみられる神賀詞奏上の規定にもあてはまる。さらに、出雲旅人の奏上記事に、「禄を賜ふこと常の如し」とあることから、この時期に賜禄について一定の基準ができていくことが窺われる。また、出雲豊持の奏上記事には出雲国司による引率のことが記されており、これも『延喜式』の奏上規定にあてはまる。これらのことから、第三段階の時期を神賀詞奏上儀礼の完成期ととらえた。

第十章「古代出雲の寺と新造院」は、『出雲国風土記』にみられる寺と新造院について考察を加えたものであり、特に他の『風土記』にはみられない新造院の実体の説明を試

みた。その結果、新造院は、基本的には寺院としての性格を持つものであるが、八世紀初期に施行された寺院併合政策と関連させてとらえるべきであると考えられる。すなわち、八世紀初期に全国的におこなわれた寺院併合政策によって、出雲国においても併合が実施され、その結果、併合によって新たにできたものが新造院であり、併合されずにそのまま存続したものが寺、つまり、教皇寺と規定することができる。

以上の本論に加えて、本論を間接的に補うものとして、次の三本を補論として付した。補論一の「韓国伊太士神社をめぐって」は、従来、渡来系の神社ということくらいしかいわれていなかった韓国伊太士神社について考察したものである。韓国伊太士神社は、式内社であるが、出雲国に六社みられるのみであり、他の国には一社もみることができない。この神社は「伊太士」をイタテと読み、五十猛命と結びつけるのが一般的であるが、こうした従来の説には説得力が乏しい。むしろ、韓国伊太士神社については、その創建期を考慮にいれるべきであると考ええる。すなわち、韓国伊太士神社は、『延喜式』が完成した延長五年（九二七）の段階には、その存在が明らかであるが、『出雲国風土記』が完成した天平五年（七三三）の段階にはいまだ創建されていなかったと考えられる。それは、『出雲国風土記』には郡毎に神祇官に登録されているものと、そうでないものとに分けて神社名が列記されており、そのなかには韓国伊太士神社は一社もみられないからである。つまり、韓国伊太士神社は八世紀初期から十世紀初期までに成立した神社といえる。また、社名の韓国は朝鮮ととらえてよいであろう。これらのことを考慮にいれて、八世紀初期から十世紀初期までの間を朝鮮を視野にいれてみるならば、対新羅関係の悪化ということが浮かびあがってくる。こうした新羅との関係のなかで韓国伊太士神社も考えるべきであり、

具体的には、「伊太士」は「射楯」であり、新羅に対する防備を意味していると考えられる。

補論二の「岡田山一号墳と銘文鉄刀」は、岡田山一号墳の発掘および研究の歴史を概観し、出土した銘文鉄刀の意義について整理をおこなった。具体的には、銘文鉄刀に登場する額田部臣氏の本貫を大原郡と考え、岡田山一号墳の被葬者と額田部臣氏との関係は低いことを述べた。また、臣姓について、地方である出雲に中央豪族の姓である臣がみられる問題を指摘し、部民制の起源についてもふれた。

補論三の「出雲の神事」は、出雲にみられる代表的な神事をいくつかとりあげ、それらの概観を述べた。まず、海の神事として知られる美保神社の青柴垣神事と諸手船神事とをとりあげ、それらが民衆を主体として執りおこなわれていることを指摘した。また、出雲大社にのこされている神事についても検討し、古伝新嘗祭や亀太夫神事などが現在でも出雲国造と密接な関係があることを述べた。また、出雲大社と佐太神社とに伝わる神在祭を比較的にとり扱い、それぞれが現在も民衆の生活の場と密接に結びついていることを指摘した。

以上の如き論考を総括して、古代の出雲地域史の研究の結果、私は以下の如き諸点をこの地域史の特殊性として指摘することができた。

1 出雲の古代史という場合、出雲国の内部では、従来、東部と西部との政治抗争にのみ注意がいきがちであるが、一方、北部においても島根半島の東部と西部とを中心に海人集団の存在が想定され、南部においても飯石郡から大原郡・仁多郡にかけての地域を中心に製鉄集団の存在が考えられる。

2 従来は、出雲国を南北でとらえるという視点は、まったくといってよいほどなかったが、『出雲国風土記』によって、製鉄集団の神であるスサノオ神、およびその御子神達の傳承分布を追求していくと、南部の製鉄集団による北部の海人集団の支配ということが想起され、今までの東部と西部の問題に加えて、南北の視点も無視することができないことが明らかにになった。

3 出雲の内部対立は、全域の支配に成功した出雲国造によって解消されるわけであるが、出雲の場合、他の地域と異なっており出雲国造の支配力が政治的にも宗教的にもきわめて強大であり、『出雲国風土記』をみても明らかのように、そこには出雲国造の世界、すなわち、出雲的世界が展開され、他の『風土記』には数多くみられる天皇関係の記載すら最少限におさえられている。

4 『出雲国風土記』は、まさに、出雲国造の世界といえるが、その良い例として四大神の問題があげられる。四大神という扱いは、『出雲国風土記』にのみみられるものであり、史料的な制約のため、今まで総合的な考察は、ほとんどなされなかった。しかし、『出雲国風土記』を注視すると、出雲国造の祖先によって崇拜された神が熊野大神であり、この神と佐太大神・野城大神は、出雲国造家の祖先の支配した領域の境界を示しており、『天の下造らしし大神』とたたえられる大穴持命は、出雲国造による出雲統一が完成した段階において、出雲全域の神として、出雲国造によって奉斎された神であると考えられる。

5 出雲国造による支配力の強大さは、それを服属させた側からすれば、当然のことながら他地域とは異なった扱いが必要となる。『出雲国造神賀詞』の奏上はその好例といえる。

律令制国家が服属儀礼として出雲国造にのみ課した神賀詞の奏上は、出雲地域の特殊性として重要であるが、儀礼としての考察はほとんどなされていないといえる。八世紀初めから十世紀初めまで文献上、確認することのできる神賀詞奏上であるが、細かに『延喜式』の規定と比較してとらえるならば、決して同じではなく、揺籃期・発展期・完成期の三段階に分けてとらえることが適切である。

6 『出雲国風土記』にみられる「新造院」も、出雲国の特殊性として知られるものであるが、「新造院」の問題は、地方仏教の状況の説明という点でも重要である。出雲国にのみみられる「新造院」については、今までもさまざまな論及がみられるが、いまだに定説をみるにいたっていない。従来の説において欠落していると考えられるのは、国家による仏教政策への理解である。この点をふまえ、当時の寺院併合政策のなかで新造院をとらえ、いくつかの寺院が併合されて新たな寺院となったものを新造院と考えたが、こうした視点は、地方仏教の具休像を提示することにもつながるであろう。

以上によって、私の当初、企図した古代出雲の地域史に対する研究を総括することができた。ここに明らかにした結論は、古代の出雲地域の歴史を究明するという点において意味を持つと考えるが、さらに広い意味では、古代国家の形成の解明という重大な問題を考える上で一つの重要な基礎研究となり得ると考える。古代国家の成立という極めて重要で大きな問題については、いままでも多くの学者の業績がみられるが、その多くは、統一者としての大和政権側の視点に立つものである。そうした視点と同時に、被征服者としての地域の側からの視座も欠かすことができないと考える。地域、および地域間相互の動向の研究の蓄積によって古代国家の成立を把握するという方法は、斬新でかつ有効な方法である。



といえる。こうした意味で、本論文は、古代国家の成立の解明についての基礎研究としての意義をも持つものと考ええる。